

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 28 日現在

機関番号：12603

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652082

研究課題名(和文)音韻論的言語類型論における新しい分析概念装置「拡張韻」の提案

研究課題名(英文)Proposal of a new phonological unit of phonological typology

研究代表者

中川 裕 (NAKAGAWA, Hiroshi)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：70227750

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：音韻論的言語類型論の領域に「拡張韻」という新しい音韻的単位を導入することによって、南部アフリカのコイサン諸語と東アジア・東南アジアの一部の言語を横断する類型論的言語比較を試みた。これによって、従来は広く認識されていなかった当該言語群間にある構造的な類似性が観察された。この観察から、あらためてコイサン音韻論がもつ世界の言語における独自の特徴を再認識することが可能になった。そのための分析概念装置、通コイサン子音チャートと通コイサン音素配列テンプレートを整備した。さらに、今後のコイサン言語学の発達のための調査指針を具体的にコイサン横断的比較音韻論の研究調査票として発表した。

研究成果の概要(英文)：By introducing a new phonological unit "extended rhyme" into a cross-linguistic comparison between Chinese type phonologies and Khoisan type phonologies, this study has revealed their typological similarities and arrived at a better understanding of typological features of Khoisan phonology. In developing the new understanding of Khoisan phonological typological features, two analytic devices, i.e. (i) Cross-Khoisan Consonant Chart and (ii) Cross-Khoisan phonotactic templates, have been introduced and elaborated. Based on the new findings, this study has proposed a number of hypotheses and explanations for typologically uncommon properties attested in Khoisan phonology. This study also further has proposed the questionnaire of a new large-scaled project on cross-Khoisan phonology.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：コイサン 音韻論

## 1. 研究開始当初の背景

(1)本研究課題が位置づけられる研究領域は音韻論の類型論である。この領域は、音韻論的な理論の発達のために次の3つの重要性をもつ。すなわち、世界の言語に繰り返し現れる音パターンを発見・同定・分類すること。

平行的な音パターンを関係づけるための分析に指針を与えること。その音パターンを説明しようとする仮説に根拠(や反証)を与えること。本研究課題もこれら3つの学術的重要性にかかわる取り組みである。

(2)本研究課題では、この音韻論の類型論という領域に、新しい音韻的単位として「拡張韻」の導入を提案する。そして、コイサン言語学と中国語音韻学のそれぞれの伝統的音韻論記述が対象としている言語群において横断的に現れる音パターの平行性・共通性・類似性に着目する。さらに、この新しい言語類型的な視点の有効性を探求する。

(3)コイサン言語学と中国語音韻学という一見まったく接点のない伝統的な言語研究の分野に、本質的には非常に類似した音韻論的なユニットを再発見し、それに同一のラベルを与えることによって、類型論における理論的な概念にすることを試みる点が本研究の開始当初の重要な特色であった。

## 2. 研究の目的

(1)本研究の主要な目的は次の5点に要約できる。

音韻論の類型論の研究領域に、新しい音韻単位「拡張韻」による分析法・解釈法を導入する。

この音韻単位を用いた分析・解釈によって、これまで認識されたことのなかった、アフリカとアジアの言語に繰り返し現れる音パターンを浮かび上がらせることで、類型論的な新発見(再発見)をする。

コイサン諸語、東南アジア声調言語、中国語諸方言の言語横断的な比較のための新しい視座を提案し、それを初めて実施する。

それらの言語の音韻論的構造に平行的に現れる音パターンを関係づける分析を試みる。

世界の言語の音韻論を対象に、まったく新しい類型論的分類の視点をもたらしことことで、音韻論的な言語類型論に新展開の問題提起をする。

(2)拡張韻という音韻単位の提案はコイサン諸語の「強語根(あるいは強語幹)」の内部構造の精査の結果から考案したものであるが、それと同時に、中国語音韻学の伝統で中国語諸方言や東南アジア声調言語の「単音節語」の記述に用いられている「声母」+「韻母」に類似する音韻単位の認定(特に韻母を単一の音韻単位とする見解)が、「強語根」の理解に適用できるという着想に由来する。本研究課題の目的の一つには、この着想を具

体的な言語事実によって検証する試みも含まれる。

## 3. 研究の方法

(1)本研究課題では、新しい音韻単位「拡張韻」の定義の整備とその有効性の検証を具体的な言語事例を用いながら実施しなければならない。そのために、コイサン諸語からは、サンプル言語としてコエ・クァディ語族のグイ語・ガナ語・ナロ語・コエコエ語を、トゥー語族からター語、カー語族からアムコエ語、ジュホアン語を厳選する。サンプルのバランスを考慮して、コイサン諸語を構成する3語族を網羅し、もっとも多様性をもつコエ・クァディ語族からは4言語を用いる。

(2)グイ語・ガナ語は研究代表者自身の現地調査による1次資料を分析対象とし、その他のコイサン語は、それぞれの専門家から資料の提供を受ける。それらを対象に拡張韻による再分析を討議するワークショップを実施する。ワークショップは、研究成果発表会ではなく、未公開資料も含めたデータの試行錯誤的な分析の試行錯誤を行う。

(3)さらに、中国語音韻学の枠組み(声母と韻母)による記述が伝統的に用いられている言語(中国語諸方言やタイ系言語)の専門家との協働により、中国語音韻学から見た拡張韻の有効性と問題点について討議する。そして、あらためてコイサンと東アジア・東南アジアの言語を横断する音韻特徴の類型論の可能性を探求する。(本研究におけるこの部門は、関連する言語の専門家との面談と討議を実施した。まず研究代表者が、コイサン諸語の「拡張韻」による分析結果の事例の提示をして、それをきっかけとして、それに類似し関連する当該言語の現象の情報提供をしてもらい、その再解釈の可能性について討議をした。)

(4)それぞれの言語において関連する語彙素形式(いわゆる「強語根(強語幹)」と「単音節語」)の典型的で主要なものを開始部と拡張韻に分割し、拡張韻の内部構造や音韻的ふるまいを分析パラメータを用いて解析し、言語横断的なパターの平行性を特定する。

(5)拡張韻の内部構造の解明のために、語根テンプレートを設定し、そのテンプレート内における分節音および弁別素性の分布の観察を行う。また、対立する声調メロディとそれの現れる領域とを同定する。

## 4. 研究成果

(1)拡張韻の導入により、南部アフリカのコイサン諸語と東アジア・東南アジアの一部の言語を横断する類型論的言語比較が可能になった。これは音韻論的言語類型論において、まったく新しいパースペクティブだと言える。(コイサン諸語とアジアの言語の音韻論

的な共通特徴は、これまで、ほとんど知られていなかった。おそらく唯一の例外が、コエコエ語の声調論において、声調の交替の規則の一部に、中国語の声調交替タイプのラベルとして flip-flop という用語が使われたことがあるだけである。)

(2)この比較によって、これまでは広く認識されていなかったコイサン諸語と中国語・タイ系言語との間にある構造的な著しい類似特徴や平行性が、とくに、語彙的形態素の音素配列論、素性分布制限、声調分布の点で観察されることが分かった。これらはすべて拡張韻をその領域としていると解釈できる。一方で、非常に異なる構造的な特徴は、語彙的形態素の頭子音の目録と、そこに関与する弁別特徴であることもあらためて明らかになった。

(3)上記の観察から、あらためてコイサン音韻論がもつ世界の言語におけるユニークな特徴を再認識することが可能になった。また、それを可能とするための分析概念装置が整備された。具体的には、通コイサン子音チャートと通コイサン音素配列テンプレートである。は、横軸を13種類の調音位置特徴、縦軸を27種類の系列特徴から構成される表で、これまでに観察されている弁別の頭子音にはすべて表記を与えたものである。横軸と縦軸に関わる尺度は次の特徴の組み合わせからなる：

横軸：

[Labial],  
[Dental], [Alveolar], [Palatal],  
[Velar], [Uvular], [Glottal];  
[±affricate], [±lateral], [±apical];  
[±click].

縦軸

STOP: [plain], [voiced], [voiceless ejective], [voiced ejective], [voiceless aspirated], [voiced aspirated].

CLUSTER: C1=[plain], [voiced];  
C2=[Uvular], [Glottal].

NASAL: [voiced], [voiceless],  
[preglottalized], [prenasalized].

FRICATIVE: [voiceless], [voiced].

また は次の4種類のテンプレートである：

OV1C<sub>m</sub>V2  
OV1V2  
OV1N  
OViP

このうち冒頭のテンプレートが基本形で、つづく2つは(通時的または共時的に)派生形と解釈できるものである。また、4つめは表意音語根にのみ使われるテンプレートであ

る。本研究では、従来は乏しかったコイサン言語学における表意音語の研究成果も多くもたらされた。そして、この表意音語根にのみ現れるテンプレートが、通コイサンの観察されるといふ知見も得られた。

この基本形 OV1C<sub>m</sub>V2 の開始部(0)は2子音連続(C<sub>1</sub>+C<sub>2</sub>)と解釈できる。また、OV1C<sub>m</sub>V2 の内部は、次のような非常に歪んだ弁別素性の分布をすることが確認された。

0: [Dorsal]が優勢  
V1 C<sub>m</sub>: 非[Dorsal]が優勢  
V2: [Dorsal]が優勢

(なお、 と のいずれについても、詳しくは主な発表論文の雑誌論文 を参照)。

(4)このコイサン音韻論のユニークな特徴の再認識に役立つ、いくつかの重要な仮説(初期調査的コイサン横断比較による現時点での一般化)を提案することができた。たとえば、主要な仮説としては、下記の学会発表で論じた頭子音の子音連続解釈仮説、学会発表 で提案した舌背素性集中回避仮説と奥舌母音制限批判仮説があげられる。

また、通コイサンの変異のパターンは、子音については語彙的形態素の頭子音に独特の規則性として捉えられること、母音についてはV1のもつ母音素性の階層性

[round] > [pharyngealized] >  
[glottalized] > [breathy]

によって捉えられることも仮説として提案できた。

(5)最終年度の締めくくりには、コイサン諸語でもっとも複雑な分節音体系をもつことが知られているター語の専門家のクリストフ・フリード・ナウマン博士を招聘し、通言語比較音韻論のための新音韻単位の設定に関する総括を行った。そして、拡張韻が、コイサン・タイプ、中国語タイプの音韻構造の極めて特徴的な性質を、明瞭に浮かび上がらせることができ、その意味で音韻論的言語類型論に重要な貢献をしようという見解を共有した。

(6)本研究課題が成果には、さらに、今後のコイサン言語学の発達のための調査指針を具体的に提案したことも含まれる。この調査研究ガイドラインは、下記の研究発表①~④で公表し、そこで受けたフィードバックをふまえて、雑誌論文 にコイサン横断的比較音韻論の研究調査票として発表をした。そこには、音韻論的類型論の視点からコイサン音韻論を総合的かつ包括的に探求するために設定した資料収集の方法と、その記述・分析方法とを記し、さらに、分節音のテンプレートにおける分布を解明するための54の問題

と声調を解明するための12の問題とを提案した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

Nakagawa, Hirosi Khoisan comparative phonology project questionnaire: provisional version, 『東京外国語大学論集』88号, 2014 刊行予定(査読無)

Nakagawa, Hirosi G|ui ideophones: work in progress, *Asian and African Languages and Linguistics*, No.8, pp.99-121, 2014(査読有)

Nakagawa, Hirosi Phonetics and phonology: ||Gana subgroup, *The Khoesan Languages* (edited by Rainer Vossen), Routledge, pp.64-71, 2013. (査読有)

Nakagawa, Hirosi Tonology: ||Gana subgroup, *The Khoesan Languages* (edited by Rainer Vossen), Routledge, pp.99-103, 2013. (査読有)

Nakagawa, Hirosi Linguistic documentation of selected Kalahari Khoe languages, 『東京外国語大学論集』86号, pp.243-262, 2013. (査読無)

Nakagawa, Hirosi A first report on G|ui ideophones, *Geographical Typology and Linguistic Area: With special reference to Africa* (edited by C. König, O. Hieda and H. Nakagawa), John Benjamins, pp.279-286, 2011.(査読有)

[学会発表](計6件)

Nakagawa, Hirosi Cross-Khoisan phonotactics: a typologically uncommon feature of Khoisan phonology, Kyoto University African Studies Seminar, 国内会議, 京都大学 ASAFAS, 京都大学稲盛財団記念館, 2014年3月

Güldemann, Tom, and Nakagawa, Hirosi Khoisan sound systems in typological perspective, *Phonetics and Phonology of Sub-Saharan Languages*, University of the Witwatersrand, Wits Club, West Campus, Wits, Johannesburg, July 2013.

Nakagawa, Hirosi Proposal of Khoisan Comparative Phonology Project, The final meeting of the Kalahari Basin Area project, Tom Güldemann, Aarhus University, Denmark, April 2013.

Nakagawa, Hirosi Cross-Khoisan comparative phonology, EuroBABEL final conference, European Science Foundation, Golden Tulip Hotel, Leiden, August 2012.

Nakagawa, Hirosi Genetic affiliations of Haba and Tshila, The 20th International Conference of Historical Linguistics, ICHL20 Organizing Committee, Minpaku, Osaka, August 2011.

Nakagawa, Hirosi Haba Tonology: a Preliminary Report, The 4th International Symposium on Khoisan Languages and Linguistics, Institut für Afrikanische Sprachwissenschaften, Goethe Universität, Frankfurt am Main, Riezlern /Kleinwalsertal, July 2011.

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

中川 裕 (NAKAGAWA, Hiroshi)

東京外国語大学・大学院総合国際額研究院・教授

研究者番号: 70227750